

## 証 言 6

### 1 家族構成など

- ・ 誕生年、性別 昭和4年（1929）生、男性
- ・ 出身地 宮城県
- ・ 家族 妻、子ども2人
- ・ 証言者 本人
- ・ 現在の療養所 松丘保養園

2 私は、出身地に終戦の頃の16歳の時までいました。終戦までは出たくても出られるような状況ではありませんでした。終戦後は、1人出身地を出ました。

以降は、大阪から来た人に世話になりながら、東京の浅草など各地を転々としました。

終戦の2、3年後の19歳くらいの時、その人と来道しました。当初は、2、3年で、北海道から兄弟の住む関東に戻るつもりでしたが、北海道の人はおおらかで面倒見がよく、内地とは人間が全然違ったことから、私はすっかり北海道を気に入り、内地で暮らすよりずっといいと思って、1人そのまま北海道に残ることにしたのです。

来道して最初の1、2年は、土木の現場仕事で道内をあちこち回りましたが、その後は胆振管内に定着して、土建業を始めました。

その土地に定着したのは、雪が積もらないので、住みやすかったからで、もっとも、仕事となれば、全道各地、どこにでも行きました。

このようにして私が始めた土建業は、最終的には5、60人くらい（最大で120人くらい）の人間を雇い、緩やかな勾配を付けるなどの高度な技術を要する下水道工事を請け負ったりするまでになりました。

私は、8人兄弟姉妹の5番目で、兄3人、姉1人、妹2人、弟1人がいますが、妹の一人は2、3歳くらいで死亡。現在、兄弟は2人だけです。

結婚したのは私が24、5歳の時で、2歳上の妻と結婚しました。

3 私が松丘保養園に来た経緯について話します。

(1) 昭和34年頃、私は、両腕の神経痛を病むようになり、夜も眠れないくらい痛くなりました。

そこで、私は妻や娘を連れて私の故郷の母親のところに相談に行ったところ、母親から、松丘保養園で治療を受けるようにと言われたのです。

(2) 実は、私の母親もハンセン病の患者でしたので、母親には私の症状が何かということがすぐに分かったし、松丘保養園のことも前から知っていたのだと思います。

なお、私の母は、ハンセン病の患者といっても、療養所に入所したことはありませんでした。

警察が母のところにやってきたということもありませんでした。

そもそも、私は出身地で、警察が来て誰かを強制的に引っ張っていったとか、そういった話を聞いたことはありませんでした。

私は、子供のころから母がハンセン病にかかっているということは知っていました。子供でも、大人同士の会話を聞いたりして、何となく分かっていたのです。

でも、母は元気で、病気と言っても眉毛がないくらいで他はしっかりしていましたし、警察が来たりとかいうこともありませんでしたので、特段怖い病気だという認識もありませんでした。

私の兄弟姉妹でハンセン病になったのは私だけでした。

(3) 私は、出身地に帰ったその足で、早速松丘保養園に行くことにしました。

なので、私の場合は、何処か病院を経由して松丘に来たというわけでも、無理やり連れてこられたというわけでもなく自発的に松丘保養園に来たということになります。

最初に松丘保養園に来たのは、昭和34年の12月の初めころになると思います。

そこで色々な検査を受けたのですが、あちこち検査をするので時間がかかり、私はそれが嫌になって正月は一旦、北海道の家に帰り、正月明けにまた松丘に戻って治療を受けました。

その後、1年くらい松丘保養園で治療をし、翌年（昭和36年）3、4月頃に松丘保養園を退所して北海道に戻りました。

その後は仕事もありましたので、松丘保養園と自宅を行ったり来たりしていました。

自宅と松丘を行き来している間は、2、3日松丘保養園で治療を受けて、それから自宅に戻る、という生活でした。

松丘保養園での治療は、プロミンの注射と、丸薬の処方が中心でした。

自宅に戻る時には、丸薬を出してもらいましたが、1カ月分しかくれませんでした。

なくなったらまた来てということで、1カ月ごとに松丘保養園に行く必要がありましたが、夏場は仕事が忙しく、また昔は今と違って交通も発達しておらず、海が荒れていると連絡船が出ずに何日も函館で待たされることもある状況で、とても1カ月ごとに松丘保養園に行くなんてことはできませんでした。

一方、冬場は土木の仕事もないので、1カ月くらい松丘に滞在することもできましたので、その時はプロミンの注射を打つという治療を受けることができました。

4 昭和53年の春頃、苫小牧で下水道工事をしていた時、私は神経痛で目が真っ赤になり、頭も痛み出しました。

信号も近くまで行かないと見えなくなり、その内に、完全に失明状態になってしまいました。

車にも乗れなくなり、仕事が出来ないので、妻に付き添ってもらい、また松丘保養園に行きました。

先生に点滴を打ってもらい、何とか目が見えるようになりました。

私の会社は、昭和53年9月に下水道工事を完成させましたが、ユンボという建設機器を買ったりしたので、完全な赤字状態でした。

しかし、視力の低下により仕事に支障をきたすようになり、その後飛行場のケーブル工事でたくさん黒字を出すことも出来たので、それを機に、昭和53年12月に仕事を辞めました。

雇っていた従業員達は手に職があったので、その後も仕事に困ることはなかったはず

です。

昭和53年6月に、松丘保養園の病棟に入りましたが、もっとも、病棟に入っていたと言っても、園長が私の好き放題にさせてくれたので、私は、朝点滴を打ってもらったら、園を出て外のパチンコ屋に行って、晩までパチンコを打っては病棟に戻ったりしていました。

- 5 昭和55年9月、私は病棟を出られることになり、園長からこのまま園の寮に住んでもいいと言われましたが、寮に空き部屋が無く、自宅に戻るかどうか、どうしようかと困っていたところ、寮の2階に空き部屋が一つあることが分かり、そこに入るようになりました。

もっとも、後で分かりましたが、そこは死人が出たばかりの部屋とのことでした。

それで、仕方がないのでせめて供養してあげようと、後でお寺さんに頼んで御祓いをしてもらいました。

こうして、私は松丘保養園に住む場所を作りましたが、その後も、妻は自宅に居るので、自宅と松丘保養園とを行ったり来たりしていました。

ただ、松丘保養園に部屋が出来たこともあって、松丘保養園にいる時間の方が長くなりました。

妻や娘の方でも、用事があれば松丘保養園まで来てくれました。

- 6 平成13年には、松丘保養園の近くにアパートを借りて、妻を住ませました。娘は2人とも、嫁に行きました。その妻も、一昨年の5月に糖尿病で亡くなりました。私は、北海道に妻のお墓を作り、以降は、毎年墓参りに行っています。

- 7 ハンセン病について思うことを述べます。

もし自分がハンセン病にかかっていなかったら、もっと大きな仕事がやれていたかもしれないと思いますが、自分がハンセン病に罹患したことは仕方ないと思い、あまり考えないようにしています。

誰のせいでもないのに、誰かを恨んでも仕方が無いことだからです。

ただ、国に対しては、伝染しやすい病気じゃないのにどうして伝染病などと宣伝して多くの人を苦しめたのか、と言いたいです。

病気がうつった人なんて誰もいないのに、強制収容なんてして、そのために家庭を壊された人はたくさんいます。

自分は酷い目に遭ってはいないが、ここ松丘保養園にも、北海道の出身者で、警察に無理やり引っ張られて貨物列車に乗せられて連れてこられた入所者の方がいます。

親が無理やり連れて行かれた人もいますし、あまりにも人を馬鹿にした話です。

補償金は出ましたが、家庭を壊され人生を狂わされた人からすれば、そんなはした金を貰っても何にもならないのですから、国は本当にとんでもないことをしたと思います。

- 8 選挙の通知はちゃんと園に届いています。

松丘保養園の場合、園の中にも投票所があって、そこに投票に行くことができます。

# 証 言 7

## 1 家族構成など

- ・ 誕生年、性別 昭和13年(1938)生、女性
- ・ 出身地 後志管内
- ・ 家族 祖母・両親と6人兄弟
- ・ 証言者 本人
- ・ 現在の療養所 松丘保養園

## 2 生家の状況

現在、祖母と両親は亡くなっています。一番下の妹と弟は、私が松丘保養園に入ってから生まれております。私はいわゆる婆ちゃん子でした。

### (1) 私の家は果樹園を経営しておりました。果物の栽培と加工です。

私が松丘保養園に入った後のことですが、両親が生存中に果樹園経営を止めたと聞いております。母は平成8年頃に亡くなりました。父は母より先に亡くなっておりますが、何時だったのか正確に言えません。

### (2) 兄弟姉妹は全員結婚しています。私も昭和38年に結婚しました。

家族や親戚にハンセン病の人がいたかどうかは分かりません。

## 3 松丘保養園へ入所するまで

### (1) 発症について

昭和22年、小学4年生のときに、遠足から帰って2~3日経った頃から私の顔が腫れてきました。家族も私も漆にかぶれたのではないかと考えていて、そのまま学校に通っていました。しかし、なかなか顔の腫れは治りませんでした。

そんな折り、学校でコーラス会があり、選ばれた生徒が学校に残って歌を唄うことになり、私もその中に入りました。そしてみんなと一緒に唄うことになった時に、男と女の先生が私の方を見ながら「らい」とか「青森」がどうのこうのと、この病気のことを話していました。それを聞いて私は「あっ」と思いました。

少し経ってから別の先生が来て、「一寸残れ。これから病院に行ってみよう。教員室に行って着替えてくるから待っててくれ」と言われました。私は、先生方の様子が変わるので怖くなって、そのまま家に逃げ帰りました。それっきり学校へは行きませんでした。

### (2) 不登校と隠れた生活

学校から家に逃げ帰って母にコーラス会での出来事を話したところ、母から「もう学校へ行かなくていい」と言われました。その日を境に町の小学校へ行っていません。

腫れた顔だったので、表に出て友達と遊んだりすることはできませんでした。ただ家が果樹園でしたので、その中に入っていたら他の人に会うこともないので、果樹園の中が絶好の隠れ場所でしたし、遊び場でした。両親も私のことを近所の人に知られないようにしていました。

学校にはずっと行っていないので、学校から両親に何か言ってきたのかも知れませんが、両親からは何も聞かされませんでした。

しばらく自宅で隠れた生活をしていましたが、顔の腫れは治りませんでした。

そこで、翌年(昭和23年)のまだ春の雪が残っている3月、婆ちゃんに連れられて山田温泉に湯治に行きました。しかし、腫れが取れずかえって悪くなったので5月頃に家に戻り、昔から家族で通っている病院に行きました。その病院で青森に行くように言われたのです。

病院から保健所に連絡がなされたようで、しばらくしてから保健所から白衣を着た人が家に来て、検査するので「鼻をかんでくれ」といわれ、鼻をかみました。その後、両親は7月頃に青森に行くように言われたようです。母は保健所の人に余り大きくしないでほしいと頼んでいました。私は青森に行ったら死ぬんだと思っていました。

### (3) 近くの町のおばさんの存在

私と同じ町内ではありませんが、近くの町にらい病のおばさんが居て、「髪が溶けてなくなっている。皮膚もあちこち腐って溶けている」という噂が広まっていた。母はこのおばさんがどんなことになっているのか、家の近くまで見に行き、そのおばさんの家中が消毒されたようだと言ってくれました。

私も近くの町に、そういうおばさんが居るということは聞いて知っていました。そのおばさんの子どもは、私と同じ小学校に通っていた子で、学校では遊技などを一緒にしたことがあります。私は、7月になったらこのおばさんと一緒に青森に行くことになるのだと思っていましたが、保健所の人には菌がないので、7月に青森に行くのはそのおばさんだけで、私はお盆が終わってからでよいと言ってきました。

### (4) 家から松丘保養園まで

9月5日、私を青森に連れて行くために保健所の人と道庁から男の人と女の人が家に来ました。父は道庁の人に婆ちゃんも一緒に連れて行ってほしいと頼みましたが、その人から「そんなに生活が苦しいのか」と嫌みを言われて断られました。父は、口減らしのために婆ちゃんを青森に連れて行ってほしいと頼んだのではなく、私がまだ小さいし婆ちゃん子だったので、心配の余りお願いしたのでした。

保健所の人、道庁から来た2人と父と私の5人で汽車に乗りました。保健所の人から「早く治ってね」と声をかけられましたが、私は自分を連れにきた大人を恨みました。道庁の人は私を怖がってか、最後まで一言も私に声をかけることはありませんでした。ただ、今思えば私を連れに来た人も私を見て気持ちが悪かったのではないかと考えています。

汽車の中と青函連絡船の中で白い粉を体中に噴霧されました。私だけならまだしも父までかけられたので、私は「止めてくれ」と文句を言いました。青函連絡船が青森港に着いたとき、担架を持った人が私たちがいた船倉に来ました。しかし、そのとき私は甲板に出ていたため、「居ない。居ない」と騒いでいました。私が寝たきりの病人だと思っていたようです。

船が着いてから、ジープで運ばれて9月6日の夕方4時頃に松丘保養園に着きました。その日は面会宿泊所に泊まりました。

#### 4 松丘保養園入所

##### (1) 入所時の診察について

9月7日に診察を受けました。診察といっても診察室はなく、みんなが注射などしているところでした。背屏風もありませんでした。そこで園長から素っ裸になれと言われ、私は泣き出してしまいました。そうしたら屏風を持ってきてくれました。

##### (2) 近くの町のおばさんとの出会い

診察が終わってから、父から「7月にここに入ったおばさんのところに行ってみないか」と言われ、父に連れられてそのおばさんの部屋を訪ねました。町の噂では「髪が溶けてなくなっている」と聞いていましたが、全然違っていたため、私は、思わず「あら。おばさん髪があるね」と言ってしまいました。おばさんは私に「2人で元気になって見返してやろうね。治ったと言って町中を歩かねば」と励ましてくれました。

父はおばさんに「この子を頼みます」と言って頭を下げていました。

私はおばさんの部屋によく遊びに行きました。おばさんの子どもは私と同じ小学校に通っていた子で、時々おばさんを訪ねて来ていましたが、お互いに見られないようにしていました。このおばさんは、既に亡くなっています。

##### (3) 食事について

松丘保養園に着き、次の日の昼ご飯は茶色の団子が2つ乗った皿が床に置かれていて、その床は縁のない畳が敷かれていて、その上をノミのような虫が飛びはねていました。汚くて食べる気が起きず、結局食べられませんでした。

夕食は麦が沢山入ったご飯、おみおつけは大根の刻みが入った塩汁でした。松丘保養園での炊事は全て入所者が行っていました。

##### (4) 子供舎での暮らしなど

子供舎に入りましたが、子どもが沢山いたので寂しくはありませんでした。みんなが仲間感覚で、仲良くしてくれました。私は家から衣服や食料とお金を少し送ってもらっていたので、他の子どもにくらべて恵まれていました。食べ物などはみんなに分けてあげました。

子供舎の子ども達は、夕食時の4時頃になると井に入ったご飯だけを持って、知り合いの大人の部屋に行き大人と一緒に食事をしていました。出身地で面倒を見たり、見られたりしていました。私一人だけ部屋に残っていたら、子供舎の舎長のおばさんが私一人置いておけないと言って、自分の部屋に連れて行ってくれました。1年間くらいご飯を持って舎長のところに通いました。

松丘保養園には、私の町から1里位離れているところから来たというおじさんがいました。結婚していて奥さんは東北の人でした。このおじさん夫婦が、遊びに来ないかと私を誘ってくれていました。私が通っていた舎長のおばさんが舎長をやめたので、このおじさんのところへ通うようになりました。

おじさんは船大工さんでしたが、昭和9年に徴兵検査を受けてこの病気がわかったと話してくれました。おじさんとおばさんは夫婦舎に入っていました。おばさんは手も悪かったので、私が茶碗を洗ったり、洗濯をしてあげました。

現在の面会者宿泊所がある場所に小学校がありました。女子は10人位で、男子は

3～4人でしたが、中学校の時はもう少し男子が増えていました。

先生は小学校、中学校とも1名で患者の中から選ばれた代用教師でした。昭和27年か28年に女性の正式な教師が来ました。私は昭和29年に中学校を卒業しました。

子供舎では、夜6時から宿題、7時から子ども全員が「火の用心」で園内の見回り、9時頃に就寝でした。停電も多くありました。子供舎の近くに火葬場があり、度胸試しをしたこともありました。昭和25年12月5日、みんなで「火の用心」と声を張り上げて見回りをしているときに分館の陰から黒煙が上っているのを見つけて、「火事だ。火事だ」と騒ぎました。

炭火の不始末が原因で医局が燃えました。大風子の医療器具なども焼けてしまいました。

松丘保養園に入って5年位経った頃、検査を受けた上で10日間ほど家に帰りました。

14歳か15歳の頃よりキリスト教会に通い、18歳頃に正式に入信しました。現在教会員は11人しかいなくなりました。

## 5 中学校を出てから

### (1) 昭和30年頃からいくらか気持ちが楽になってきました。

中学校を卒業して1年間子ども達の面倒を見てから、大人の部屋がある健康舎(一般独身舎)に入りました。その部屋は縁のない30畳くらいのところでした。

1年くらい後になって、建物改造のためその部屋を出て15畳の部屋に移りました。この部屋には4人が入りました。大人の部屋に入ってから作業を指示され、不自由舎に手伝いに行き、不自由な人や弱い人の介助をやりました。

その後はミシン作業を5年間ほどやりました。ミシン作業場には10人位の大人がいて、私はその人達に教わりながら作業に就きました。松丘保養園で使う敷布、掛布団の上掛け、丹前などを作りました。作業時間は朝8時から夕方4時迄で、その間10時から10時30分は治療時間でした

ミシン作業を辞めた後も色々な作業に就きました。事務所の2階に福祉部があり、そこで先輩からタイプライターを習い、書類作りをやりました。2階には渉外部、食料部、作業部、経理部などがあり、タイプ作業は全ての部に関わる仕事でした。この作業は昭和35年から昭和43年までやっていました。この時期に夫との文通を開始しています。

昭和43年に障害手帳がもらえるようになり、作業は出来なくなりました。それ以降仕事はしていません。

### (2) 健康舎に入ってから、不自由舎に手伝いに行っていましたが、昭和40年代には、松丘保養園の近くの津軽の人が看護員(当時は看護さんと呼んでいました)として通ってきており、掃除、洗濯、副食の刻みや皮むき等家政婦さんの仕事をしていました。

この人達は、園の外では不自由舎で生活している人達を「座敷豚」と言っていました。

### (3) 松丘保養園の外で買い物をすることもありましたが、平成8年以前は、店で品物を

買うときは、店の人は私に触らないようにしていましたし、私も触られないようにしていました。

世間では伝染病で病気が移るという強い考え方があったのと、私たちの容貌等を見て触れたくないということだったと思います。しかし、平成8年を境にコロッと態度や対応が変わったので驚きました。外見だけみると結核の方がいいなと思っています。

## 6 治療について

昭和24年まで大風子注射を受け、その後はプロミンになりました。

大風子は明治時代からあった薬で、一日おきに注射されました。看護婦が次から次と注射するのですが、痛くてたまりませんでした。

プロミン注射は子どもを優先的に扱っていて、大人の場合は30人くらいを選んで注射していました。プロミンは大人も子どもも同じ量を注射していて、そのために子どもは熱を出していました。私は、昭和25年か26年にプロミン注射を受けて肋膜に罹り、結核の治療をされるという試験台にされましたが、結果的に効きました。こんなこともあって、だんだんとプロミンもやらなくなりました。

2～3年前から手が固くなってきました。年を重ねると後遺症が進むので、寂しくなります。それ以外に特別具合が悪いことはありません。夫は血圧が少し高いほうですが、健康といえます。

## 7 結婚のこと

### (1) 私は昭和38年に結婚しました。

夫は長野県出身で中学校を出て直ぐに草津の栗生楽泉園に入りました。栗生では編集部に入ってたことから、私との文通が始まり、何度か松丘保養園に遊びにきました。

結婚するにあたり、夫は栗生より松丘の方が良いということでした。そこで栗生、松丘各園から正式に許可をもらって入籍して、夫は松丘保養園に移ってきました。

結婚して松丘保養園に移って来たのは夫の外に2人くらいいたかと思います。

私の本籍は結婚により長野県に移っています。ですが、長野県の里帰りはお断りしています。夫も北海道への里帰りには参加していません。

### (2) 夫は結婚の条件である断種手術を受けました。自分達の子どもをつくれないうのは当たり前だと思っていました。

結婚して直ぐに夫婦舎に入れました。部屋がなかったのですが、寮長が部屋を明けて私たちを入れてくれたのです。この部屋は長屋の中の4畳半で、隣とはベニヤ板で仕切っているだけですので、話し声は何でも聞こえました。トイレに行くにも長屋の共通の廊下を通ります。2～3年後に空いた部屋に移りました。

## 8 娯楽のこと

松丘保養園では、レクレーションや買物ツアーを行っております。私はそれにいつも参加しています。また、個人でも夫が車を運転して、松丘保養園から1時間位の範囲でドライブしたり、買い物をしたりしております。



平成8年まではハンセン病患者と分からないように行動していましたが、その後は青森の人も認識が変わり、嫌な思いをすることはなくなっています。

## 9 その他

### (1) 家族との関係

私は、昭和38年迄に3～4回家に帰りました。事前に検査を受け許可が出るまで1週間ほどかかりました。北海道に行くとき洞爺丸が転覆した後の惨状を見ました。

その後は、道庁の里帰り事業で北海道に行くことはありますが、家には戻りません。家に戻っても隠れているだけなので、親たちが札幌に出てきて会いました。

直ぐ下の妹は年に1回くらいは松丘保養園に面会に来てくれます。この妹は結婚しましたが、夫には私のことを隠しています。その夫はもう亡くなっています。

一番下の妹は私が松丘保養園に入ってから生まれました。妹とは12歳年が離れています。妹は両親から私のことを「八戸に住んでいる親戚の人」と教えられていて、私を「内地のおばちゃん」と呼んでいました。私はここの人間だと言ったら、妹は「あの人も姉妹だったのでしょうか」と両親を責めたと聞いています。

姉には、一度いい話(結婚話)があったようですが、私のために駄目になったと聞いています。ただ、その結婚話が駄目になって1年くらい後に結婚して、他の土地に行ってしまった。姉からは妹達の結婚話が持ち上がったときに、投げ文されたことがあったそうで「あんただけ苦労しているんでないよ」と言われました。

兄は、私がこの病気になったため、(自分の)仕事も全部変わってしまった等と言っていました。両親の墓は弟が守っています。兄も弟も嫁には私のことを隠しています。

### (2) つらかったこと

つらいと思ったのは、家に帰れないことです。帰っても世間から隠れなければなりません。兄弟姉妹が私のためになかなか結婚出来なかったり、私の同級生が家族に私のことを「どうしてる」と尋ねることがあり、返事に困っているという事を聞かされたりするとつらいです。

### (3) 改善して欲しいこと

松丘保養園では、何をするにも時間が決まっていて堅苦しく思っています。職員は夕方5時で仕事を切り上げるため、その時間に間に合うように何でもバタバタと急いでやられてしまいます。また、私は神経痛なので少し室温を上げて暖かくしても、「暖かくし過ぎだ」と言って下げられてしまいます。もう少し自由にやれる範囲が欲しいと思っています。

### (4) お墓について

病気だからと世間から隠れているくらいなら、松丘保養園に居た方が良いと思っています。私が死んで骨になっても、家の墓や三内にあるカトリックの墓にも入る気はありません。ここの納骨堂に入れてもらいます。

夫には東京都内に墓がありますが、夫もその墓には入らないと言っています。

## 証 言 8

### 1 家族構成など

- ・ 誕生年、性別 昭和4年（1929）生、女性
- ・ 出身地 上川管内
- ・ 家族 両親、兄2人、弟2人、妹1名
- ・ 証言者 本人
- ・ 現在の療養所 松丘保養園

### 2 松丘保養園へ入所の経緯と園での生活の様子

私は、6歳のとき、母に連れられ、母、兄2人と4人で入所しました。

母、兄らは、入所時発症していましたが、私は、発症していなかったため、園の外にあった保育所に入所しました。

このとき、保育所に、何人いたかは、覚えていませんが、私の入所した保育所は、未感染児童だけが収容されていました。

入所後、私は、たまに、園にいる母親に会いに行きました。

母と会うのは、園の許可を貰って、園内の母親が生活をしていた部屋でした。

部屋には、合計4人程度いたと思うが、どれ位の広さかは、覚えていません。

昭和17年、兄が死亡しましたが、その年の4月、発症が確認され入所しました。

私が入所する契機は以下のものでした。

保育所の児童を対象にした検査（触覚検査：筆で、身体を触られ、感じるか否かを検査され、何も感じなければ、発病が確認される）で、発病が確認され、園の中に収容されました。

確か、検査は、定期的に行われていたと思います。

そのとき、母親はまだ元気でしたが、私は未成年でしたから、若草寮（未成年者の女子の入る寮）に入りました。

若草寮は、個室であったこともあり、何人寮にいたかは覚えていません。

若草寮に居た頃は、作業等は何もなく、同世代の子どもが集められ先生から授業を受けていましたが、何年程度受けていたかも覚えていません。（保育所にいた頃も授業を受けていたが、入所後は別の先生から指導を受けていました。）

13歳になると若草寮から健康寮に移ったが、健康寮は、個室ではなく、大部屋で一部屋に、5～6人で暮らしていました。

作業は、17～18歳から開始するものでしたが、18歳ころに、病気で私の手が悪くなっていきました。

この頃、園に医師がいないので、治療を受けることもなかったし、また、効果的な治療薬などありませんでした。

この頃、大風子油を使用したことがありましたが、副作用の痛みがひどかったため、使用を止めました。

昭和23年頃、プロミンが開発されると、直ぐに注射してもらいましたが、以後は、

病気は良くなってきました。

プロミンの注射は、数年受け、その後、完治し、現在は、定期的に経過の診断を受けています。

18歳ころから、不自由舎の患者の看護を行うようになりました。

具体的な作業内容は、舎の掃除、食事の配膳でした。

作業をすると、労賃を貰っていましたが、いくら貰っていたかは、覚えていません。

数年後、手の外、足も悪くなったため、不自由舎に移転しました。

19歳の時、最初の結婚をしました。

夫は、留萌管内出身だったと記憶しています。

夫の家族は、病気になっていませんでした。

夫の病気は、軽症であったため、農作業をしていました。

私達は、結婚後、直ぐ、夫婦寮に入りました。

長屋のような建物に、四畳半の部屋で生活していました。

結婚の際、夫は断種の手術を受けたが、結婚の条件であり、やむを得ないものと思っていました。

夫は、昭和34～35年頃に死亡したため、生前、里帰り等は一切できませんでした。

夫の遺骨は、園内の納骨堂に納められ、後に分骨し、実家の墓にも納められています。

夫の父親が一度面会に来ただけでしたが、その家族がいま何をやっているかは、一切分かりません。

私は、昭和39年頃、秋田県出身の人と再婚しました。

当初は、元気で、農作業、園の清掃をやっていましたが、段々、病気の影響で手が悪くなり、作業ができなくなっていきました。

夫には、秋田県内に、妹、弟らがいる、私達は、夫婦で兄妹に会いに行き、歓迎されました。

しかし、その再婚相手も、昭和57年に死亡しました。死亡時、70歳台だったと思います。

四十九日経過後、夫の遺骨は、家族が引き取り、実家の墓に納骨されています。

松丘でも数年前までは、レクリエーションがはじまるとよく参加しました。

例えば、花見、温泉などのレクリエーションがあり、参加していましたが、平成13年に足の手術を受けた後は、歩行が困難であったため、レクリエーションに参加しなくなりました。

私の父や弟らは、出身地で、畑仕事や山仕事をやっていたと思います。

父は、何度か、面会に来ていましたが、その後、園の家族寮（患者の家族を収容する寮）に入り、数年後、死亡しました。

現在、私の兄妹は皆死亡しており、甥（弟の子）が、現在、実家を継いでいます。

その他、出身地には、いとこが一人おり、連絡を取り合っていますが、園に会いに来ることはありませんでした。

私は、数年前に、出身地を訪ね、親戚と会ったことがありました。

### 3 現在の状況

現在、ハンセン病は完治しています。

加齢により、膝の軟骨がすり減っていき足の調子が悪くなり、平成13年に手術を受け、以後、歩行が困難になっています。

その他、頭に血栓が詰まっており、いつ倒れるか分からないと言われており、治療を受けています。

4～5年前から、弘前大学の医師複数が診断に来るようになり、治療等についての不安はありません。

隔離を強制された私の環境等について、若い頃は色々考えていましたが、今は何も考えなくなっています。

若い頃は、園から出たいと考えましたが、不可能でした。

平成13年の熊本地裁の判決を聞いたとき、色々考えたが、今はもう忘れてしまいました。

また、このときは、もう年を取っていたため、園の外で生活しようという気にはなりませんでした。

## 証 言 9

### 1 家族構成など

- ・ 誕生年、性別 昭和2年（1927）生、男性
- ・ 出身地 後志管内
- ・ 家族 妻と子ども2人
- ・ 証言者 本人
- ・ 現在の療養所 松丘保養園

### 2 家業

私が生まれた家は農家をやっており、主に田んぼで稲を作っていたほか、畑もやっておりました。

### 3 発病前の生活状況

昭和20年（1945年）夏、私は国から兵隊に召集されたところで終戦を迎えたので、私は命拾いをし、家業の農家の仕事に励みました。

何年かして私は結婚し、息子と娘の2人の子宝にも恵まれました。

### 4 ハンセン氏病の発病と松丘保養園入園

昭和35年（1960年）のことで、私は、指先がしびれ、手の感覚が悪くなって、脱穀機で左手の指を切断してしまいました。

それまで私は手先がしびれるなどという症状はありませんでした。

どうも難しい病気のようなということで、北大病院で診察を受け、ハンセン氏病と診断されました。

私は先生から「治すところがあるから行かんか。」と勧められ、私は「治してもらえるのならば。」と思い、応じることにしました。

この頃、子どもたちは小学生でした。

私は妻を残して家を離れることになります。

父親が当面いなくなる子どもたちの世話は兄に頼み、私は郷里を離れ汽車と青函連絡船を乗り継いで移動しました。

移動の際には、札幌からきた付添の人がずっと付いてきました。

松丘保養園に入所した当時、私は33歳でした。

入所すると、園の職員の人が「名前を変えるように」と言ってきて、そればかりでなく名前まで付けられました。

一方、私は「治ったら帰れるんだから。」とも聞いていました。

### 5 松丘保養園での生活

入所してから、昭和38年まで3年間私は療養に努めました。

私は「3年で出られる」と思ってきたのですが、実際には3年で出られるということ

はありませんでした。

それでも、体調の回復が進んだときに、園を退所しています。

そのときは、松丘保養園内の健康舎まで青森市内の別の場所から通っていました。

しかし、やがてまた、体調を崩し園内に入所しての生活に戻りました。

昭和40年代から平成にかけて、私は園内で7～8名の大部屋で住んだことはなく、1人の部屋で暮らしてきました。

私は、手にけがをして手が不自由であったことから、園内での作業に就くことはありませんでした。

大きく言えば、今まで50年間ずっと私はこの園にいます。

## 6 家族のその後

郷里に残してきた妻は、保養園に面会に来てくれていましたが、その妻は58歳という若さで亡くなってしまいました。

私は、わけあって妻の葬式に行けませんでした。

息子は家業であった農業を継ぎ結婚もしましたが、息子の結婚式にも、私は出ていません。

やがて息子夫婦に孫が生まれました。

また、娘は結婚して名古屋に行きました。

息子は60代になる今も畑をやっており、兄も郷里で畑を作っています。

兄や息子のほかに、郷里には親戚が暮らしています。

## 7 近況など

平成20年(2008年)から私は今いる棟に入り、つい最近、9月からこの部屋に入って生活しています。

私は、本当は息子や孫と暮らしたい気持ちはありますが、それはなかなか難しいところがあります。

日々の楽しみは、地域のお祭りを見たりすることですが、息子たちが会いに来てくれることが一番です。

今でも息子は面会に来てくれますし、息子の嫁も孫も会いに来てくれます。

また、名古屋に嫁いだ娘も、たまにここまで訪ねてくれます。